



ひよく たびね 比翼の束

第七十七回 われ ときには吾にかえることも

暦はすでに大寒に入った。暖冬とは言え、外はこの冬一番の寒さだと言う。

静まりかえった真夜中、机に向かって一枚のCDを取り出し聴いている。

「手紙～親愛なる子供たちへ～」である。

「手紙～親愛なる子供たちへ～」

原作詩：不詳 日本語和訳：角智織 作曲：樋口了一

年老いた私がある日 今までの私と違っていても
どうかそのままの私のことを理解して欲しい

私が服の上に 食べ物をこぼしても

(中略)

あなたと話す時 同じ話を何度も何度も繰り返しても
その結末をどうかささげらずにうなずいて欲しい

(中略)

楽しいひと時に 私が思わず下着を濡らしてしまったり
お風呂に入るのをいやがることには 思い出して欲しい
あなたを追い回し 何度も着替えさせたり 様々な理由をつけて
いやがるあなたとお風呂に入った 懐かしい日のことを

(中略)

いずれ歯も弱り 飲み込むことさえ 出来なくなるかも知れない
足も衰えて 立ち上がる事すら 出来なくなったなら
あなたが 弱い足で 立ち上がろうと 私に助けを求めたように
よろめく私に どうかあなたの手を握らせて欲しい

(中略)

あなたの人生の始まりに 私がしっかりと 付き添ったように
私の人生の終わりに 少しでも付き添って欲しい

(中略)

私の子供たちへ
愛する子供たちへ

この歌「手紙」をききながら、母へのさまざまな思いが蘇ってきた。

母は、80歳を過ぎた頃から認知症が日に日に進行し、84歳で旅立った。気丈な母であったが、日に日に自分を失っていく母の悲しみや苦しみを痛いほど感じながら、最後まで一緒に暮らした。

そして間もなく、自らも同じように人生の終期を迎えるその準備を整えなければならない、その時期に来ている。

「苦爪楽髪」という諺がある。

苦勞している時は爪がよく伸び、楽している時は髪がよく伸びる。苦樂ともに忙しい時は余裕がなく、どちらも伸び放題になってしまうということであろう。

母が「爪を切ってくれないか」と言ったことが何

度かあった。

年老いて視力も弱り、手も不自由になって、その都度縁側の日だまりで母の手と足の爪を切ったことがある。

無言のうちに時間が経ち、「ありがとう、体が軽くなったような気がする」と感謝の気持ちを伝えてくれた。

母の手は、これまでの生活がにじみ出ているようで節々が太く、手足の爪が貝殻に似た貝爪であった。

父の亡きあと、この手で必死に生活を支え、私どもを育ててくれたその一つひとつのしわのぬくもりを感じ、熱い気持ちがこみあげてきたことを今でも憶えている。

先頃、「老人漂流社会」というテレビドキュメンタリーが放映された。

老夫婦世帯、一人暮らしの高齢者世帯の生活。わずかな年金のみが頼り、認知症も進み、親の介護のために退職を余儀なくされた息子との生活、そして親子共倒れの現実をみて、決して他人ごとではない、自らの身に迫る現実であることを思い知らされた。

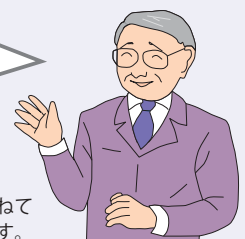
自らの余命を自立するための自助努力と、公助と共助による老後の医療と介護の必要性を痛感しつつも、その実現の難しさに直面し、市長としてじくじたる思いである。

私たちは豊かさの中で大切なものを忘れさり、失ってしまっている。

今、私たちに必要なことは、親と子、家族の絆である。支えあって生きること、助けあって生きること、古くから受けつがれてきた日本社会の親子の絆、家族の絆、地域の支えあい、助けあい、それがないかぎり、住みよいふるさととは築けない。

矢板市長 遠藤 忠

私（市長）の思いや
願いなどを市民の皆さんに
お伝えします。



※タイトルの「比翼の束」とは、
市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねて
まい進するさまをイメージしています。